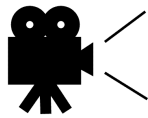




2012 年
会報 夏
No.35

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。

シティ・ライツ代表 平塚千穂子



ごあいさつ

暑中お見舞い申し上げます。蒸し暑い日が続いていますが、皆様いかがお過ごしですか？
まずは、とにかく、第5回 City Lights 映画祭、ご支援をいただき、ありがとうございました。

皆様のお陰で、今年も無事、大盛況のうちに、幕を閉じることができました。

振り返ると、映画祭の当日を迎えるまでは、長い長い道のりでした。会場を決め、作品・企画・テーマを決めるところから、実行委員のメンバーが、月1回の会合に集まって、知恵をしぼり、アイデアを出しあい、話し合いを重ねてきましたが、もちろん、スムーズに行くことばかりではありませんでした。今年はメンバーが少なかったこともあり、5回目でのんきに構えていたところもあって、決めなければならぬことが、なかなか決まらず、前に進まないことも多々あって…「こんなんで大丈夫なのかな？」と心配になることもありましたが、私自身も「もう、この状態では続けられないかもしれない。」と思った瞬間もありました。でも、誰もあきらめてはいなかったから、前を向くことができました。

企業への協賛のお願いも、チラシやパンフの制作も、宣伝も、当日の運営も、どれをとっても、実行委員一人一人の存在がなければ、あの日の映画祭は迎えられませんでしたね。

一番には、映画祭を誰よりも大切に思い、進行を見守り、いつも気にかけてくれていた、実行委員長のノンちゃん存在が大きいです。映画祭のブログで小説を書くという、思わぬ才能を発揮して、私たちをワクワクさせてくれた長田さん。「声をかけることだけは任せて！」と、方々に宣伝してくれたテッチャン。お仕事の傍ら、申込受付やチケットの販売・発送の作業をマメにこなしてくれた大坪さん。パンフレットの原稿を集め、校正チェックやCDのラベル貼りなんて面倒な作業も、真面目に取り組んでくれた幸絵ちゃん。会社のCSR部や、後輩の視覚障がい者たちに声優ボランティアへの参加を呼びかけ、はじめての人たちでも参加しやすいムード作りしてくれたドビーちゃん。本業のお仕事がとても忙しい萌ちゃんやたかこちゃんも、遅くなっても会合に出席して、ボランティアの私たちが気づけない事をサポートしながら、仕事のスキルや情報を生かして、宣伝や、業者・監督との交渉、DVD販売等に力を注いでくれました。

実行委員以外にも、新規協賛企業の獲得に尽力してくれた栗原さん。映画祭のブログやアンケートサイトを作ってくれたみみすけさん。チラシ・パンフのレイアウトデザイナーを紹介してくれた中島さん。水彩画家の池田憲昭さんを紹介してくれたキムタクさん。字幕朗読のキャストと演出してくれたダンさん。声優ボランティアの皆さん。そして、ガイドづくりに協力してくれたメンバー、モニター、ナレーター、一人一人の存在が、皆、有り難かったです。

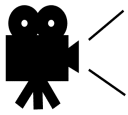
そして、迎えた当日は、97名のボランティアがそれぞれの係で、映画祭の創り手となって、支えてくれました。表だっては、総合司会のみーたん&大輔さん、トークショー司会の武藤さんが、持ち前の明るさで、バリアフリーな空間を皆さんに知っていただく、あたたかい演出と、リラックスした雰囲気づくりしてくれました。また、裏方では、楽屋班の清本さんが、お弁当だけでなく、パンやおにぎりまで注文して、スタッフのお腹を満たしてくれたり、野外統括の米谷さんと誘導班の大久保さんは、前日の夜中の2時まで、当日の安全なサポート体制がとれるよう、誘導ペアの組み直しを考えてくれていました。また、FM送信オペレーターの小山田さんとマナちゃんは、前日の仕込みで「素晴らしき哉、人生」に予告篇がついていることを知ると、当日は急遽ライブガイドをつけてくれました。

皆、それぞれ、頼まれたことを、ただするだけではないのです。自分の「いい」と思うことを自ら考え、持ち前のセンスで、期待以上のものを発揮してくれます。それを自然に、当然のごとくやってくれていますが、それは、映画祭に訪れるお客様と一緒に働くスタッフの存在を、大切に思ってくれているからこそ、なんですよ。

他にもあげたらキリがありませんが、荷物運搬の車を出してくれるはるのぶさん。一つ一つ丁寧に、手書きの名札を作ってくれるハカラメさん。スタッフやお客様のイキイキとした表情を、カメラにおさめてくれる米谷さんの旦那さんやビデオ係の服部くん。一人一人の存在が、皆、有り難いです。

毎年、City Lights 映画祭には、他では味わえない、あたたかさを感じるのですが、今年は特にそれを感じました。是枝監督も驚いていましたが、お客様の反応があまりにもよくて、笑ったり、声をもらしたり、拍手したり、というのが自然におこる、まるで「ニュー・シネマ・パラダイス」全盛期のような、人間味のある、あたたかい上映空間でした。

この空気は、「映画はこうやって観るもの」なんて固定観念に縛られない、バリアフリー上映だからこそ。でもあると思うのですが、きっと、それだけではないですね。すべての存在が大切にされている安心感が、このあたたかさを生み出していたのではないかと思います。



活動報告

このコーナーでは、近日(4~6月まで)に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・4/7 『僕等がいた・(前編)』 MOVIX さいたま
- ・4/8 『ウルトラマン・サーガ』 ユナイテッド・シネマとしまえん
- ・4/9 『汽車はふたたび故郷へ』 岩波ホール
- ・4/15 『僕達急行～A列車でいこう』 川崎チネチッタ
- ・4/21 『タイタニック<3D>』川崎チネチッタ
- ・5/6 『名探偵コナン 11人目のストライカー』 ユナイテッド・シネマ浦和
- ・5/12 『プライズメイズ』ヒューマントラストシネマ有楽町
- ・5/13 『僕等がいた・後編』 新宿ピカデリー
- ・5/26 音声ガイド付きプロレス観戦 イノキ・ゲノム20 東京ドームシティホール
- ・5/27 『テルマエ・ロマエ』 ユナイテッド・シネマ としまえん
- ・6/2 『宇宙兄弟』 川崎チネチッタ
- ・6/4 『オレンジと太陽』 岩波ホール
- ・6/16 『さあ帰ろう、ペダルをこいで』 シネマート新宿



特集

映画祭をめぐる～オリンピック記念

何回目か忘れました。今年は、オリンピックイヤーなので、イギリスで開催されている映画祭を紹介します。そういえばイギリスの映画祭は今まで取り上げていませんでした。

<概要>(ウィキペディアより)

エディンバラ国際映画祭

エディンバラ国際映画祭は、イギリス・スコットランドの首都エディンバラで毎年6月に開催される世界最古の国際映画祭のひとつである。1947年の創設以来、一度の中断もなく毎年連続で行われている映画祭としては世界で最も長い伝統を誇る。エジンバラ国際映画祭、エデンバラ国際映画祭とも表記されるが、本項では外務省の表記にならないエディンバラの表記を用いる。

イギリス特有の独立精神からFIAPF(国際映画製作者連盟)には加盟せず、独立不羈を貫く「伝統と格式の国際映画祭」である。当初はドキュメンタリーに主軸を置く映画祭であったが、現在は全てのジャンル、長編・短編映画ともに扱う総合映画祭である。かつて、ロバート・フラハティ監督『レイジアナ物語』、ロベルト・ロッセリーニ監督『ドイツ零年』、溝口健二監督『雨月物語』などの名作が、この映画祭でワールドプレミアを行った。イギリス作品を対象とした観客賞が最高賞とされている。

観客賞受賞作品(第51回以降)

- 第62回(2008年) ジェームズ・マーシュ監督『マン・オン・ワイヤー』
- 第59回(2005年) ギャヴィン・フッド監督『ツオツィ』
- 第56回(2002年) フィリップ・ノイス監督『裸足の1500マイル』
- 第55回(2001年) ジャン＝ピエール・ジュネ監督『アメリ』
- 第54回(2000年) スティーブン・ダルドリー監督『リトル・ダンサー』
- 第53回(1999年) ヴィム・ヴェンダース監督『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』
- 第52回(1998年) ピーター・カッタネオ監督『フル・モンティ』

ロンドン映画祭

ロンドン映画祭は、毎年300本近くの映画が上映される、イギリスで最大の映画祭。正式名称は「The Times BFI London Film Festival」。2009年現在で53回目を数え、例年10月ごろに開催される。開催母体は英国映画協会、近年はタイムズもスポンサーとなっている。1956年、サンデー・タイムズの映画批評家たちのグループによって、ロンドンで映画祭を開催しようとの動きが起こった。第1回目は10月16日から26日まで、サウス・バンクのNational Film Theatreで行われ、20本の映画が上映された。

2011年の受賞結果はこちら

【作品賞】 少年は残酷な弓を射る 監督:リン・ラムジー

【BFI フェロシップ (=功労賞)】 ※ 映画またはTV文化において顕著な貢献をした人物(個人)に贈られる賞。

- ・デヴィッド・クローネンバーグ
- ・レイフ・ファインズ

特集 音声ガイド制作の精鋭部隊！ TEAM 岩波。

すっかり定番化した岩波ホールの上映会を影で支える、音声ガイドの在宅制作チーム・TEAM 岩波。今回はそのチームを率いるリーダーの栗田さんに在宅制作がどんな風に行われているのかを、ご紹介いただきました。

<岩波ホールへようこそ！>

栗田佳奈子

神田神保町の岩波ホールは、独自のポリシーに基づき数々の名作を上映するミニシアターの草分け的存在です。シティライツは数年前からこの会場で音声ガイドつき上映会を開催しています。2009年からは、ほぼ全ての作品にガイド制作するようになりました。コンスタントに制作ができるようになった背景には、在宅での分担作業がうまく軌道に乗ってきたことが挙げられます。ここでは、その様子を簡単にご紹介します。

岩波作品のガイドは、いわゆる「作りこみ形式」で制作されます。

公開初日を過ぎると劇場からDVDと採録シナリオをお借りすることができ、それから約1ヶ月の制作期間で、ガイド原稿作り・監修・ナレーション収録・字幕朗読収録・編集を行ないます。制作チーム5~6名でそれぞれ約20~30分を分担し、在宅で原稿を作ります。メールで提出された初稿を他のメンバーがチェックしコメントをつけます。コメントを元に2稿をつくり再提出。余裕があれば3稿までやりとりします。

制作開始から2週間後を目安に、「スカイプ会議」を開きます。これはスカイプの電話会議機能を利用することにより、移動時

間の省略、都合の悪い人は途中参加も可能というメリットがあります。短い休憩を挟み朝からみっちり話し合います。2時間の作品の場合、所要時間は平均10時間。その後、ナレーション担当が監修を兼ねながら自宅で録音を行ない、その音声データを編集担当がチェックし、ナレーターに修正依頼します。

一方、字幕朗読の収録が調布のスタジオで1日ばかりで行なわれます。皆さんご存知の檀鼓太郎さんが声優ボランティアのキャスティングから演出まで全て担当して下さい、オリジナルの作品を損なわないよう、省略の多い字幕を補いつつわかりやすいセリフにしていきます。毎回10数名の役者さんが素晴らしい演技を披露して下さいます。

その後、字幕朗読の音声データの編集、ガイドナレーションと合わせる作業をわずか2～3日のスピードで仕上げます。

このような制作過程を経て、公開中の岩波作品を皆さんに劇場でお楽しみ頂けるようになります。鑑賞会にはガイド制作チーム、字幕朗読ボランティアの役者さんが毎回参加しています。是非、会場で、感想や愛あるダメ出しなどお声をかけてください。それが私達の一番の励みとなります。娯楽大作とは一味違う岩波セレクトの作品を体験しに、是非神保町にお越しください。

ひ報告!!

「第5回City Lights映画祭」

～思い出しました、大切なこと～

この原稿を書いているのは2012年6月25日。つまりは映画祭の次の日です。毎年のことながら映画祭の1日は、普段の1日の何倍もギュッと凝縮されたものになるためか夢のように過ぎ去ります。そんな1日のホットな様子をこの紙面でもお伝えし、残念ながらご参加いただけなかった会員の皆さんに少しでも雰囲気味わっていただけたらと思います。

会場である江戸東京博物館の入り口が開くのは午前9時。それに先立ち当日ボランティアは集合時間の8時30分を目指して続々と夜間出入り口付近に集まってきます。実行委員は10周年記念に作った赤のtシャツ、それ以外のボランティアの皆さんは黒のtシャツに身を包み、これから始まる1日への不安と期待でいっぱいの様子です。昨年から導入した班長制が今年はずっと磨きがかかり、前日の夜に大部分の準備が済ませてあったことも手伝って、10時の開場時間まではスムーズに時が流れて行きました。

そしていよいよお客様を迎える時間がやってきました。ふと外を見ると既に開場を待つ方々の列ができていて本当にありがたい限り。チケットの前売り状況は常にゆったりな感じだったのですが、蓋をあけてみれば両作品とも300を越えるお席が埋まり、ぱつと見た感じ満席という素晴らしい状況が整いました。

午前11時。いつもとは少々雰囲気の違う司会の声で開会。めーたん&大輔さんによる説明、題して音で会場を知ろう！舞台の大きさを実際に歩いてみて示したり、非常口の場所に立つボランティアに声を出していただいたりして視覚障害者にも様子が分かったところで、私は実行委員長としてのご挨拶をさせていただきました。今回は2本の映画上映のほかに、いわきや石巻の皆さんへの支援、音声ガイドつきDVDの販売、展示コーナーなどロビーもにぎやかになっていることをお伝えしました。ちなみに、私もちゃんとハートのブローチを買いました。かわいいんですよ。

さて、映画上映についてはガイド製作に携わった方々からのレポートがありますので、私からは是枝監督のトークショーの様子をお話することにしましょう。

監督はただいま秋の連続ドラマのシナリオ執筆の真っ最中でもあり大変ご多忙。開場へいらしていただけるのもトーク開始時間間際と伺っていました。けれども、なんと14時少し過ぎにきていただくことができ、最初だけ少しとおっしゃっていたにも関わらず「奇跡」の上映も最初から最後まで音声ガイドつきで観て下さいました。もうこの時点でトークもきつといいものになるだろうと確信が持てました。恒例となった武藤さんの声かけ「この映画で笑った方、拍手して下さい」「泣いた方、拍手して下さい」に応えて会場にぱちぱちと音が響きます。その様子を監督が嬉しそうにご覧になっていたのが私にも伝わってきて、ますますその後のお話が楽しいものになって行くであろう予感がしてきました。

是枝監督の撮影の手法についてのお話。大まかな筋はあるものの撮影して編集してどんどん台本を書き換えて行くというものすごい技にはびっくりでした。でも、そのような方法だからこそ、子どもを撮らせたらぴかーと評されたり、名優の方々の存在感を遺憾なく生かすことができるのかもしれない。「まえだまえだの二人はもととすごくいい表情を持っていたのでそれを生かしたいと思って、あちこちのシーンでその表情を使ったりしました」「橋詰功さん演じる祖父と幸一の会話の場面では、自然なアドリ

ブがいい雰囲気を作りました。おじいさんって、ああいう風に孫に教えたりするんだよなってことが伝わったらなと思いました」「恵美の家で子どもたちが願ひ事を話すシーンはフリートークだったんですけど、カンナが絵がうまくなりたいと言ったことで、この子を絵を描くのが好きな子っていう設定を作ったりしました」などなど、思わず自分が登壇していることも忘れて聞き入ってしまいそうになるほど興味深い撮影秘話でした。

また、監督の作品と音という支店では、写っているところと別なところの音が聞こえてくるみたいなシーンがあちこちにあることが一つの特徴でしょうかという振りに対して「あれは言ってみれば日本家屋の独特の、仕切られてない家の雰囲気を表しているみたいなのところがあるんですが、集中していないと分かりにくかったりしてあまり新設とは言えないのかもしれないですけど」と。音声ガイドでもいつも悩むところは、見えている人でも気をつけていないと気づかないようなことの答えを伝えすぎではいけないのではないかと。親切過ぎると観る人の感じる幅を狭めてしまうのではないかと。そんなところがなんとなく似ているのではないかと。転回も面白かったですし、あるシーンをどう解釈しているかでガイドの言葉選びが変わってくる。それが違っていたとかそういうことでなく、ああ、こういう風に感じて作られたんだなあ興味深かったですと監督に言っていたのはとてもありがたかったと思います。

1時間近いトークの様子をまとめるのはとても難しくてもどかしいのですが、今回お話をさせていただいて、私はこれからは是枝監督の作品をずっと観て行こうと改めて心に決めたとことで締めたいと思います。

なお、監督が台本を手がけられ前11羽の演出をされるフジテレビ系連続ドラマは、阿部寛さん、山口智子さんを夫婦役に据えて10月にスタート。映画の次回作は既に撮影を終えて来年秋の公開を待っているとのことでした。楽しみです。



第5回City Lights映画祭の上映作品『素晴らしき我、人生』では、声優ボランティアさんを広く募集し、たくさんの方々に字幕朗読にご参加いただきました。そこで、声優初挑戦のお二人（風船さん、小柳津さん）と、演出担当のダンさんに、この作品に挑戦しての感想や、収録本番に向けた意気込みなどを聞いてみました。（お話は、5月5日、初練習後に聞きました。）

<記録：映画祭実行委員 小平幸絵>

- リーダー：今回声優をやってみてどうだったか感想を聞かせてください。
- 風船さん：前から声優をやってみようかなーどうしようかなーと思っていたのですが、なかなかできなくて。どうやるのかすごく不安だったんですが、一番最初のオーディションの時に、いろんなオーディションのやり方を提案していただいたんですね。それがすごく新鮮で…。普通見えている方は、画面を見ながらセリフを言っている。でも、私は見えないし、すぐセリフを覚えられない。どうしよう！どうなるんだろうと思っていたら、横に人がついてくれて、読んでくれたりして教えていただいたんです。『口立て』というんですか？今までも、習い事をする時に、こういうやり方（話してもらったことを覚えて自分でも真似していくような方法）をしてきたので、すごく、懐かしくもあり、楽しくもあり、面白かったです。それで、すごく安心だったしあったかい感じがして。事前にリーダーから、練習用にCDも送ってもらって、役作りもできました。見えなくて、自分の出番がわからなくても出番のタイミングも教えてもらったし、すごく参加しやすかった。この映画自体もすごく好きな作品だと思っていたので、自分が関わってうれしいなと思っています。
- 小柳津さん：映像に合わせて声を当てるのは今回が初めてだったんですが、これが非常に難しかったです。タイミングを取ることばかりに意識を取られて…。難しかったんですけどなかなか面白い経験でした。あとは、短いセリフの中に、いろんな背景とか、意味が詰まって出来ているということを周りの方々に教えてもらって、その深さというか、映画の見方が変わるかなという感じがしました。すごく勉強になりました！！
- ダンさん：この映画は、無駄な場面・無駄なセリフがひとつもない。細かい役の一つ一つまで、丁寧に作られて演出されていると感じました。細かい役の、セリフ一言一言にも背景があり、生活があり、その人物ひとりひとりのセリフと表情で、各々の人生がちやんと伝わる演出が施されている。それぞれのキャラクターが、ちゃんとそれぞれの人生を生きている感じ。だから、セリフをただ言えばいいわけじゃない。言い方のニュアンスの中にその人の人生が見えるようにしな

きやいけなから、これは声優として演じる経験の少ない人にはハードルが高い作品だなあとも思った。

- リーダー： 今日、演技経験の浅い人にもセリフやそのセリフの背景を分かっもらうためのダンさんの演出がすごく面白いと思っただけだ。それぞれ自分にひきつけて、役作りのシチュエーションを考えるとところなんか。例えば、作品の中で“お金が下ろせない！大変だ！”というシーンを表現してもらうために、自分の身の回りで起こりそうな「大変な事」に置き換えて「トイレが空いていない！！」とかいう状況を想像してもらったりしてね。(笑)。

● 小柳津さん： あれ、すごい新鮮な考えでしたね。

- リーダー： あまり、演技の経験がなかったり、うまくできないと思っていても「ああ、そういう風に考えればいいんだ」と、ヒントになるよね。

● ダンさん： 答えは、自分の中にある。普段の暮らしの中にあるんですよ。

● 小柳津さん： なかなか、思いつかないですよ。そこに。

- ダンさん： 結局描かれているのは、人の日常だから、国は違うけれどやっていることは同じなので、アメリカの日常を演じようとしなくて、もしこれが、日本の日常だったらどうかな？というところから入れればいいんですよ。日本語にした段階で、日本人が共感できればいいんですよ。そのために、まずは、自分の日常の中に、これと似たシチュエーションはないかな？と探すところからはじめればいいんです。

- リーダー： そうそう、誰でもできるものなんだな一って思ってもらえたらいいなあ。うまくなくてもいいと思うんだけど、今日、気づいたこととか、発見したこと、自分にできること、それぞれ課題を得て、それを収録で発揮してくれたらいいな。それこそ、「素晴らしきかな人生」かな(笑)

● 風船さん： 実は、言葉の語尾なんかも、少し違うだけで印象が全然違う事にも改めて気づいて、すごく新鮮だった。

● 小柳津さん： そうそう、抑揚ひとつでも、全然変わって聞こえてしまう。

- リーダー： 自分で、語尾とかに何かつけたほうが読みやすいというものもあるだろうし、その辺も自身で考えてきてくれていいし。決まりきったものを読まされるとか、型にはめて自分がこの役にならなきやいけなとかいうんじゃないんだよね。自分でどうしても言いにくいところがあれば、そこをどうするか？変えてしまっても構わないと思うし。視覚障害の人が、「どういうやり方だったら読めるのか」とやり方を色々工夫するのと同じなんだよね。

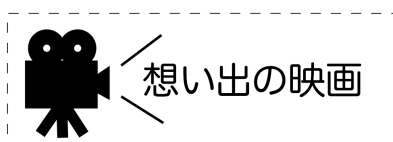
● ダンさん： 言い回してひとつじゃないから、どういう言い回しがいいか、その役のキャラクターを変えずに、シチュエーションを変えずに、でも通じるような言い方が他にないかな一って考える作業をしていけばいいんですよ。

● リーダー： 最後に、収録に望むにあたっての意気込み、映画祭を見て聞いてくださる方へのメッセージなどをお願いします。

● 風船さん： とっても楽しい映画です。それと、出演者すべてが、自分の人生を生きてるってところを感じていただけると、とってもうれしいです。出演者だけでなく、あなたの人生も素敵だと思っていただければうれしいな♪。

● 小柳津さん： すべての登場人物が持つ背景や意味まで考えて、自分の役に望みたいと思います。主人公だけじゃなく、脇をかためる人の人生もしっかり描かれている作品なので、皆さん、そこも見てくださいと思います。

● ダンさん： ま、ガンバってもらおうか！！あ、私もポッターさんの演技をがんばります。(笑)



一思い出は、名画とともにいつまでも一。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

「思い出の映画」

<吉村 齊湖>

自分にとっての「思い出の映画」とはなんだろうと、しばし思いを馳せてみた。これまで出会った作品を全て顧みることは到底できないが、その経験の中でもやはり、映画館で見る映画は特に記憶に深く響き続け、自らのインスピレーションや思いを反芻するこ

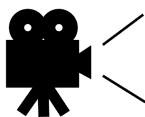
とができる特別な楽しみとなっている。私の場合、それは恐らく幼い時に体験した映画館そのものの感覚やイメージが、大人になった今なお残り続けているからかもしれない。私の初めての映画館体験は5歳の時、母親に連れられていった日比谷にある映画館だった。映画は、シドニー・ルメット監督、ポール・ニューマン主演の「評決」。このころから、テレビでアカデミー賞授賞式が放送されるようになった記憶があるが、「評決」はこの年の作品賞にノミネートされた作品であった。結果的には同賞にノミネートされていた「ガンジー」が作品賞を含む、8冠に輝いた年でもあった。そんな話題の映画にも関わらず、まだ5歳の子供の私は入場無料でお弁当持参という不思議な格好での初映画館となった。当然、作品の内容はほぼまったく理解することはなかったが、初めて見るスクリーンとそこに広がる映像、そして湧き上がる音楽や法廷シーンでの鬼気迫る人々の顔、顔、顔。ほんとなんだかよくわからないけれど、なんか凄いものを見てしまった、5歳の感覚が飽和しきった、これまでに体験したことのないとても刺激的な時間だった。こんなことを思い返すたびに、時々無性に「評決」を見たい衝動に駆られる時がある。みなさんもぜひ一度、記憶の奥のほうにある作品を掘り起し、追体験してみたいはかがらうか？

『評決』●原題: THE VERDICT

●制作年: 1982年 ●監督: シドニー・ルメット ●脚本: デイヴィッド・マメット

●主演: ポール・ニューマン ●日本公開: 1983/03

アル中で人生のどん底にあった中年弁護士ギャルヴィンの、甦った使命感と自らの再起を賭けた法廷での闘いが中心に描かれたリーガル・サスペンス作品



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2012年4月1日～2012年6月30日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員] ・田中正子(神奈川県川崎市在住) ・金子元輝(神奈川県川崎市在住)

■2012年度総会のお知らせ

いつも活動をご支援いただき、ありがとうございます。今年はCity Lights映画祭が6月後半にずれ込んだ関係で、総会の開催も、だいぶ遅れてしまい、誠に申し訳ありませんでした。下記のとおり総会を開催いたしますので、事務局まで、出欠のご連絡を、7月末日までお願いいたします。

日程: 8月4日(土) 14時～16時 場所: 東京都障害者福祉会館 (1階 A1集会室)

【総会の内容】 1) 2011年度活動報告及び収支決算 2) 2012年度活動計画及び収支予算

■音声ガイド+字幕朗読付き上映会のお知らせ

◎ 9月2日(日) 14:40～ 立教大学 池袋キャンパス(8号館)

上映作品 『カンタ・ティモール』〈2010年/製作国: 日本/カラー/110分〉

監督/広田奈津子 制作・音楽/小向定 監修/中川敬(Soul Flower Union)

東南アジア・東ティモールを舞台に、大地との絆を描くドキュメンタリー。1999年までの24年間で人口の3分の1を失うという、狂気のような殺りくを受けた東ティモール。消えない悲しみを抱きながら、許すという選択をした人々の姿が、美しい音楽と共に綴られる。日本が深く関わりながら、ほとんど報道されなかった東ティモール問題を取り上げた、国内初の作品。世界中で起こっている資源をめぐる争い。そのからくりから抜け出すことが出来るのか？今を生きる私達全てに問いかける。

※この上映会は、NPO法人 共同連の主催する「第29回 共同連全国大会 東京大会」特別企画―共生のあり方を問う―の一部として行われます。

◎ 10月8日(月・祝) 16:30～ 岩波ホール

上映作品 『イラン式料理本』〈2010年/製作国: イラン/カラー/72分〉

監督・脚本・製作 モハマト・シルワーニ ★2011年山形国際ドキュメンタリー映画祭 市民賞/コミュニティシネマ賞 受賞作品

イランから届いた、とっておきの家庭の味。

キッチンには、いつだって、笑いと涙というスパイスがあった。新婚夫婦のキッチンから、ベテラン主婦の台所まで、さまざまなイラン人女性が披露する今晚の献立や、伝統的な家庭料理の作り方。そこから浮かび上がるのは、男と女、嫁姑、家族というドラマ、そしてイラン社会の今と昔。さまざまな思い出とともに引き継がれる家庭料理は、笑いや涙というスパイスによって、味わい深く熟成されていく。

※いずれの上映会も、お申し込み方法などの詳細は、メーリングリスト等でお知らせいたします。
お電話でお申し込み・お問い合わせの方は、シティ・ライツ事務局(03-3917-1995)まで。



編集後記

編集スタッフ、校正係や音訳スタッフも大募集！
希望の方は会報編集課まで！

(会報編集課 ノンちゃん) ちょっとした必要に迫られてfacebookを始めてからそろそろ一年。最初のアカウント取得ではめっちゃめっちゃ聞き取りにくい、雑音の中に僅かに聞こえるような文字をメモして指定の場所に入力するという難問？(と言ってもこれは画像認証ができない視覚障害者に配慮されたバリアフリーなのです、念のため)があったり、音声環境ではなかなか操作しづらいところがあったり…。結局行き着いたのは携帯用のfacebookサイトをパソコンで操作するというやや限定的な方法なのですが、それでもだんだん楽しめるようになってきました。

そして、最近、一人の有人とこのfacebook上で10年以上ぶりに再会。そこから次々に学生時代の懐かしい人たちへとつながりました。ほとんど音信不通に近い状態だった人ばかりで、皆それぞれの場所でいろいろな活動に参加していることが分かりました。友人が増えて行くということは、そこから出会いが繋がって行くということであり、その繋がった人が関心を持っていたり、関わっていたりするページへの繋がりがもできて、知らない世界が少しずつ広がって行くことにもなるのですよね。

セキュリティとかそういったことには気を配りつつも、上手に楽しくネットの世界でも暮らして生きたいものです。

(会報編集課 吉川) みなさんこんにちは。これが、届くころはもう夏ですね。今年も半分終わり、6月を過ぎたあたりから、時の流れの速さを実感します。前回の編集後記で、アカデミー賞受賞した「アーティスト」について書いたので、鑑賞後報告をしたいと思います。作品賞受賞しただけあって、役者の演技や演出・音楽といった映画としての“つくり”は完璧でした。ストーリー運びも秀逸且つコンパクトにまとめられていて疲れずに見ることが出来ます。ただ、だからといって感動する映画かというところでもあらず…。話はあるきたり、展開に意外性もないのでサイレントかつモノクロという”特別な仕掛け”がないと見ていてつらいかなという作品です。ものすげえ映像があるわけでもなく、「見てよかった、いい経験でした」で終わってしまうレベルの作品でした。(映画好きの友人には、見てよかったよと答えておきました…。)

GWに池袋で見たのですが、客席はガラガラ、非常にさびしい鑑賞でした。そして、そして、本編終了後に流れるエンドロールの最後に「作曲家…に捧ぐ」の文字が。受賞の影で、尊い命が失われたことを思うと、ますます寂しくなりました。

(会報編集課 石坂春香)

古代メソポタミアで書かれた「ギルガメシュ叙事詩」には映画「もののけ姫」の元ネタになったと言われるレバノン杉のお話が載っています。この話は今から5000年前のシュメール人が書いたものですが、そんな昔から人と自然について書かれていたということが深い意味を持つ気がします。人が発展するには自然を破壊しなければならない。しかし自然を破壊すれば、そのしっぺ返しが必ず人間に戻ってくる。自然とともに生きるにはどうしたらいいだろう…アシタカが映画の中で見つけられなかった答えを私は見つけられるだろうか。連日報道される自然災害のニュースを見ながら、ふと考えてしまいます。石坂

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は10月10日。投稿される方は、9月第2土曜日までお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2012年7月10日発行 編集: 吉川俊平、斉藤恵子、石坂春香

発行者: バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ

事務局: 〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995

E-mail mail@citylights01.org URL http://www.citylights01.org

